批評・紹介

中國書論集

中田勇次郎 著

昭和四十五年四月　東京　二玄社
B5判　四〇〇頁

中田勇次郎氏の『中國書論集』が二玄社から刊行された。B5判・四〇〇頁の大冊である。この種の書物の刊行は、中國の書および文化を愛するすべての人々の久しい要望であっただけに、喜びもひとしお大きい。

中國を對象とする學問の中でも、書というジャンルはどうも學者のあいだでいつも繼子あつかいにされてきた觀がある。ある意味では特殊な分野であり、ある意味ではあまりに身近かな分野であるためであろうか。文學、史學、哲學の人たちはもちろん、東洋美術の專門家でさえ、書のことにあまり觸れたがらず、たとえ觸れても全集やシリーズものの解説をアルバイトに執筆するくらいであった。まして實際の書作家は、技術や感覺の練磨に忙しいから、書の文化史や書の藝術論などを深く掘り下げてみようとする人もたいへん少ない。にもかかわらず一方では、最近文部省が小學校の毛筆書寫を復活することにふみきったことなども手つだって、出版界はちょっとした書道ブームである。このことは一應よろこばしい現象であるが、その出版物の內容についてみると、あいかわらず通俗で淺薄なものが多い。こうした中にあって、本書の刊行は我々の渇をいやすに十分であり、瓦礫に埋まった珠玉のような獨自の光彩を放つに至るのである。

著者中田勇次郎氏は昭和十年に京都帝國大學文學部支那語學支那文學科を卒業され、大谷大學教授、京都市立美術大學(現藝術大學)教授、同學長を經て、昭和四十五年に退官、現在同大學名譽教授である。宋詞の研究から出發され、近世文人の生活と思想に及んだ業績は、『宋代の詞』(昭和十五年八月)、『譯註詞選』(昭和十七年十二月)、『譯註考槃餘事』(昭和十八年十月)、『文房清玩』一、二、三(昭和三十六年八月—三十七年九月)、『歷代名詞選』(昭和四十年七月)などの著作となって刊行された。また近年ではとくに書道史關係の研究にも力を注がれ、『王羲之を中心とする法帖の研究』(昭和三十五年十一月)、『貫名菘翁』(上田桑鳩氏と共著、昭和三十七年四月)、『日本の篆刻』(昭和四十一年十一月)、『書』(昭和四十二年五月)、そして本書および本書と姉妹編をなす『日本書道の系譜』(昭和四十五年九月)などの大作をあいついで發表され、さらに現在中央公論社から『書道藝術』全二十卷が氏の責任編集のもとに刊行されつつある。

近年、歐米における東洋ブームの波にのって、書もようやく國際的な美術界の注目を集めるようになり、西洋美學の立場から書の藝術性について新たな檢討を加えようとする試みが、一部の美學者や書家たちの手によって行なわれてきた(例えば井島勉博士の『書の美學と書教育』など)。ところが、書を生んだ母國である中國や日本において、書の藝術的認識がどのように展開されてきたかという、肝心の內側からの基礎的な研究は、まだほとんど手がつけられていない現狀である。これまでにも書論の譯注といったものは、た

とえば『國譯書論集成』をはじめとして いくつか 刊行されてきたが、各時代の書論を、新しい學問の方法で分析し、體系づけるという試みは、まだほとんどなされていないような有樣である。

文學に、鈴木虎雄博士の『支那詩論史』、青木正兒博士の『淸代文學評論史』の名著があり、繪畫にも金原省吾氏の『支那上代畫論研究』、中村茂夫氏の『中國畫論の展開』などの力作があるのに對して、書にはこれらに匹敵できるほどの著述がない。このことをたいへん寂しく感じていたのはひとり私だけではあるまい。そこで私は自分の研究テーマの一つとして、詩論史や畫論史の方法を參考にしつつ、中國書論史というものを何とか體系づけようとしているのであるが、そのような私に、學生時代以來いつも無二の指針を與えてくれたのが、ほかならぬこの『中國書論集』の內容をなす諸論考であった。

これらの論文が雜誌や紀要、全集などに發表されるたびに愛讀してきたし、講演などの席で親しく拜聽したものも少なくない。今回あらためて通讀してみて、本格的な中國書論史のあらわれたことを心から喜びたいと思う。しかし一方では、あまりにもすぐれた先達の業績に對していだく一種の絕望感、征服してゆくにはあまりにも險しい高峰となって私の前に大きく立ちはだかりつつあるという感じも、正直いって告白しなければならない。

まず『中國書論集』という書名を見て、世に通行する書論の斷片的な譯注のようなものを期待する讀者があるとすれば、目次を一讀しただけで、事の意外さにおどろくだろう。ここにおさめられた二十五篇の論考は、いずれも精緻な實證をふまえつつ、卓拔な論理をもって構築された獨自の研究論文ばかりである。したがって、『中國書論集』という書名は、控えめすぎてややふさわしくない。暢達できめのこまかい文體は、著者の體質によるのか、長年詞餘の研究にたずさわってこられた敎養によるのか、いずれにせよ中國を對象とする研究論文にありがちの難解さは、少しも見られない。

その內容を目次によって左に掲げ、解說の便宜上原本にない番號を打たせていただく。

1 中國の書品論
2 書の時代性
3 漢字の書體と字形
4 草書の藝術性
5 鍾繇とその書
6 黃庭經諸本鑑賞記
7 孝女曹娥碑眞蹟本および諸本
8 南北朝の寫經
9 北朝の石刻
10 唐僧懷素の書
11 歐陽脩の筆說・試筆
12 蘇東坡の書と書論
13 黃山谷の書と書論
14 米芾著書所見法書考
15 米芾著書所見法書目錄
16 米芾書史所見唐宋公私印考
17 古法書の眞蹟本と臨摹本
18 古法書の裝背と紙絹
19 宋高宗の翰墨志

20 吳說の游絲書
21 姜堯章の書學
22 宋拓寶晉齋法帖鑑賞記
23 明淸時代の書の特性
24 張瑞圖の詩と書
25 北碑派の書論

これらを通覽して明らかなように、初めの四篇が總論的なもの、以下各論的なものが時代順にならべられている。いま二十五篇の論文を內容の上から分類すると、重複するものもあるが、㈠書論史に關するもの——1 11 12 13 19 21 25、㈡書とその時代性に關するもの——2 8 9 23、㈢書體に關するもの——3 4 20、㈣特定の書家に關するもの——6 10 12 13 19 20 21 24、㈤古法書の傳來と鑑賞に關するもの——6 7 14 15 16 17 18 22などに分類できよう。このような分類のしかたは、あるいは著者の方法にそむくかも知れないが、私は便宜上この五つに分けて內容を紹介させていただきたいと思う。

これらのうちもっともスケールが大きくまたもっとも示唆に富むのは、㈡書とその時代性に關するものであろう。とくに2「書の時代性」においては、舊來明淸の書論家によって論じられてきた「晉は韻を尙び唐は法を尙ぶ云云」という書の時代性に關する說を手ぎわよく整理して、

晉　韻　理　瀟洒　神仙
唐　法　整齊謹嚴　聖人
宋　意　縱逸　豪傑
元明　態　風流　文人

という形で示し、さらに「淸は學を尙ぶ」の一項を補足する。そしてこのような書風の變化というものが、實は儒敎、佛敎、道敎などの宗敎思想の變遷およびからみあいを反映している事實をあとづけ、現代における書のあり方を示唆する。この部分は本書の中でもっとも精彩のあるページであり、中國の文化史を考える上にも大きな示唆を與えるものと思われる。このような時代性の相違は、單に書だけにとどまらず、その他の文化現象、たとえば文學、繪畫、工藝などにもほぼ同じような現象が豫想され、しかもそれは宗敎思想ばかりでなく、各時代の社會構造や政治形態をも多少反映していると思われるので、こういう方面からの解明もなされるならば、非常に廣大な文化史の展望が開かれるであろう。（私は最近「文字造形に現われた時代性」〈由蘗四號、のち書學二二卷三號に轉載〉において、この問題を多少ちがった角度から考察しておいたから、參照していただければ幸いである）。

同じく書の時代性にかかわるものとして、8「南北朝の寫經」は、イギリスのスタイン、フランスのペリオのコレクション、さらにわが國や中國につたわるこの時代の紀年經を時代順にならべ、そこに現われる書風の變遷が、實は石刻に現われた書風の變遷とだいたい平行している事實を指摘したものである。

9「北朝の石刻」では、南朝の書論でよく行なわれてきた天然（精神）と工夫（技巧）という二つの方面から書を論じる方法を、北朝の石刻にも應用して、精神面ですぐれている張猛龍碑などを第一類とし、技巧面ですぐれている高貞碑などを第二類とし、精神と技巧の調和した敬史君顯儁碑などを第三類というように分類している。南朝の書論の方法を北朝にも應用した發想はおもしろいけれども、一つの書を精神派（著者によると自然派）とか、技巧派とか、

中和派などと區別するしかたは、今日の我々からみると、やや安易で形式的にすぎるのではないかという氣がする。たとえば高貞碑や鄭道昭の鄭羲下碑などを、單に「技巧派」と斷ずることには多少の躊躇を感じるのである。しかも北朝の石刻を碑と墓誌によって代表させておられるが、やはり龍門の造像記などはもっともっと重視されていいのではなかろうか。23「明清 時代の 書の特性」においても、2「書の時代性」と同じような立場から、この時代の書の特性についてより詳しく論じられている。

つぎに㈠の書論史に關するものにもどって、1「中國の書品論」では、書を品評するときに品第法、比況法、品性法という三つの方法のあることを指摘し、各品評形式の消長がたどられる。品評の基準については、南朝の書論ではよく天然と工夫、心と手、意と筆というものを對照させる場合が多いことは、著者の指摘される通りであるが、この他にも「骨勢」と「媚趣」という對立概念のあったことも見落してはならないと思う。この骨勢・媚趣の對置法は羊欣の古來能書人名にはじまり、王僧虔の論書を經て、張懷瓘の書論でとくに體系的にとりあげられる概念である。書論の歷史を概觀して、「古い書品では書體とか技法というものを重要な要素としてとらえているが、後世になるほど性情を大切な要素として取り扱うようになり」、いわゆる品性法が發達するという指摘はたいへん興味深い。しかしこの論文は主として『法書要錄』の內容を紹介するという形で話がすすめられているために、扱う資料が限られ、叙述もやや平板になったきらいがある。

11は宋代の書の個性的傾向をみちびいた歐陽脩の「筆說」と「試筆」を解說し飜譯したものである。12 13はむしろ作家論としてとり扱うのが適當であろうが、ここでは蘇東坡や黃山谷が、人間の主體性を大切にしながら、魏晉の書に「逸氣」というもの、すなわち「高い心がそのままに現われたにごらぬうつくしさ」を見出し、それを據にして新しい書をつくりあげていった彼らの姿がいきいきと描かれている。これに對して19 21は宋代における傳統派の書論を扱ったものである。

25「北碑派の書論」は、清朝考證學の發達にともなって書の方でも北朝の石刻資料に對する評價が高まり、その理論が阮元、包世臣、康有爲らによってどのように深められ體系づけられていったかをあとづけたもので、卷末にはこの三家を批判的にうけついだ劉咸炘の弄翰餘瀋の說が紹介されている。ところで著者はこのような清朝の北碑偏重の傾向を批判して、碑と帖とは正反對の立場にあるものではなく、本來性質の異ったものであるとして、「もし書の正統ということをいうならば、漢民漢の文化の榮えた南朝において、遺品こそ少ないけれども、當然ひきつがれていたと考えるべきである」という基本的な態度をうち出しておられる。

㈢書體に關するもののうち、3「漢字の書體と字形」は、古今の書體とその特質を論じつくして餘すところがない。草書は元來略體としておこったものであるが、それがやがてもっとも自由で純粹な藝術性を備えるに至ったとして、草書の變遷をたどったのが4「草書の藝術性」である。20「吳說の游絲書」は南宋の吳說の書いた游絲書という特殊な書體について論じたものである。

㈣特定の書家に關するものとしては、魏の鍾繇、唐の懷素、宋の蘇東坡・黃山谷、明の張瑞圖などがとりあげられている。このうちまず5「鍾繇とその書」では、後世後漢の張芝、東晉の王羲之と

ならんで中國における書の三筆の一人にかぞえられる鍾繇の書が、實際にはどのようなものであったかということについて、いろんな文獻や南朝の書論などを手がかりにして考察してゆく。その結果、「かれの生きた漢魏のころは、英雄豪傑が天下を睥睨した時代であり、その特質は豪快な氣象のあらわれにあったことを想うと、かれの書にも精神力の強さと鋭さにおいて、きわめてきびしいものがあったにちがいない。法帖に見られるようなただ單に淳古という書風だけではなかったとおもわれる」という非常に啓示的な推測に達しておられる。

唐の開元・天寶のころから狂草といわれる新しい書風が流行するが、その代表的な人物である懷素の書を論じたのが10「唐僧懷素の書」である。懷素の傳記は茶道で名高い陸羽の書いた「唐僧懷素傳」があり、また彼の草書は當時の詩人たちによって美しい言葉でうたわれているので、それらによって彼の逸事や書風を明らかにし、さらに彼の書が後世にどのような影響を及ぼしたかをあとづけておられる。

12と13については、すでに㈠書論史の項で觸れたが、著者は蘇東坡の書を評して、「行雲流水の自然さのなかに豪放磊落な性格がそのままにあらわれている。そのなかにはかれの一生を貫徹した高い精神が、忠誠なまごころとあたたかい慈悲の情をこめて祕められているのを感ぜずにはいられない」という。東坡の書をもっともよく理解したのは、彼を師と仰いだ黄山谷である。山谷は普通には詩人として知られているが、東坡とならんですぐれた書ものこしており、とくに理論的な方面では東坡よりもいっそう深く掘り下げている。山谷の書論の中でもとくに、顔眞卿の筆法が二王と合致しているという說、また中唐以後の革新的な書家とされる張旭や楊凝式でさえ晉人の超逸絕塵の逸氣を得ているという考え方を、著者はとくにとりあげ注意をうながしている。宋の書の獨自な性格は、晉の書のうけいれかたに問題があったという著者の指摘は、傳統の繼承という點で今後も非常に重要な視角をひらくものといえよう。

東坡と山谷を論じてここまでくると、これにつづけて「米芾の書と書論」とでも題する一篇がほしいような氣がする。

24「張瑞圖の詩と書」は、明末清初の人張瑞圖の文集『白毫菴集』にあらわれた彼の人間像と、彼の書にあらわれた造形上の特質とを、有機的に關連させながら描いたものである。とくに本論の末尾において、「かれの書を知るにはまずどうしてもかれの人間としての經歷やその性格やその才能などについて、くわしく觀察を行う必要がある。（中略）一人の書人をとらえても、その詩文を讀むか讀まないかによって、これほど大きな理解度のひらきが生じる」と附記している。著者は一人の書家を論じるとき、このようにその詩文の讀解を不可缺の作業として重視する。それとともに一方ではこれまでの例でも明らかなように、具體的な書作品そのものを深く鑑賞し、そこにあらわれる造形的な特質を、もっとも適切でしかももっとも平明な言葉で言い現わすことに、並々ならぬ努力をかたむけていることを感じる。こうした態度なり方法こそ、舊來の書の研究にもっとも缺けていたところである。

最後に㈣古法書の傳來と鑑賞については、さきに同じ著者によって『王羲之を中心とする法帖の研究』が刊行されたが、本書にも王羲之の黄庭經、孝女曹娥碑、そして宋拓寶晉齋法帖についての詳細な研究がおさめられている。とくに6は本文と圖版あわせて五十四

頁、22は同じく七十一頁という全篇を通じての大作である。こういう實證的で重厚な長文を、ただ目的もなく漫然と通讀するには、かなりの根氣を必要とするが、各法帖について多少とも詳しく調べてみようとする人は、資料の探索の廣さとそれを整理する手ぎわのよさに、あらためて感心するだろう。こういう長大な鑑賞記が必要であること自體、今日傳えられる羲之の書、あるいは法帖の形で傳えられるものが、いかに深い謎につつまれているかを物語っているといえよう。14 15 16は米芾の著書に見える法書および鑑藏印について調べたもの、17 18は古法書の保存のしかたについて述べたものである。

以上、私は本書の内容を五つの項目にわけて簡單に紹介してみた。全體を通讀してあらためて感じることは、書を愛する著者の並並ならぬ心ばえであり、しかも書を觀念の中で抽象化するのではなく、つねに文化の總體的なひろがりの中でとらえようとする態度である。いずれにせよ本書が、方法の新しさと内容の豐かさにおいて劃期的な業績であることは信じて疑わない。これをどのようにうけつぎどのように發展させてゆくかは、今後我々にのこされた大きな課題であるといえよう。私は、本書が單に書學者ばかりでなく、むしろ中國史とくに中國の文化史を專攻する眞摯な研究者によって廣く讀まれ、正しく評價されることを期待する。（杉村　邦彦）

義和團研究

戴　玄之　著

一九六三年十二月　臺北　中國學術著作獎助委員會
A5判　二五四頁

書評とか紹介とかを氣輕にひきうけておきながら、締切がせまるとともに重苦しい氣持ちにおそわれるのはいつものことだが、こんどの場合、とりわけその感を強くする。その原因は、本書にたち向かってみても、共感にせよ反發にせよ、こちらの側にそれほど強い感情の高まりがおこらないことによっている。その責任は私にもあるが、著者の側もまた一半の責任をおわねばならないであろう。一言でいえば、それは著者の義和團運動全體に對する姿勢の問題である。二百數十ページのこの本のなかで、著者は義和團運動に對する自己の評價を提示していない。むろん、著者の考え方がうかがいしれないというのではなく、全體を通讀することによって、それは十分想像することはできるのだが、なぜか、著者は眞正面からそれを論じようとはしていないのである。要するに、本書は義和團運動を一應包括的に論じながら、結論にあたる章をもうけていない。最後まで讀み進んでみると、なにか中途半端に終わっている感をぬぐいきれない。これは「大陸雜誌」に發表した論文を集めたという本書のなりたちにも關係するのであろうか。

ここで全體の構成を示すと、本書はつぎの各章よりなっている。

第一章　義和團的源流